

修士論文（要旨）  
2010年1月

日本語の小説読解における学習者と母語話者の“表象”形成  
—プロトコル分析から見える読み方の違い—

指導 青山文啓 教授  
国際学研究科  
言語教育専攻

207J4904  
藤原深雪

## 目次

第1章 研究の背景と目的	
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的	2
第2章 先行研究	
2.1 読み手に関する先行研究—認知心理学の見地から	2
2.1.1 スキーマと読解	2
2.1.2 Kintschの「テキストベース」と「状況モデル」	3
2.2 第二言語における読解研究	5
2.2.1 概要	5
2.2.2 日本語教育における読解研究	5
2.3 プロトコル分析を用いた読解研究	7
2.3.1 はじめに	6
2.3.2 物語文	7
2.3.3 評論文, 意見文	8
第3章 読解テキストの検討と考察	
3.1 短編小説についての考察	10
3.1.1 小説を読むときに読み手がしていること	10
3.1.2 物語の中の小説というジャンル	11
3.1.3 日本語教材として好まれる小説	18
3.2 本研究で使用する小説 唯川恵 (ゆいかわ・けい) 作品 『ユキ／ヒロコ』	18
3.2.1 唯川恵 作品『ユキ／ヒロコ』の内容	18
3.2.2 唯川恵 作品『ユキ／ヒロコ』の選定理由	19
3.3 『ユキ／ヒロコ』テキストの構造分析	20
3.3.1 一文の認定	20
3.3.2 形式上の段落と意味上の段落の認定	20
3.3.3 各文の属性, 主語, 語り手の認定	24
3.3.4 キーワードの分析	29
3.3.5 語彙の難易度	32
3.3.6 考察	32
第4章 読み手の表象形成をどのように追跡するか	
4.1 調査目的	34
4.2 被験者	34
4.3 本研究におけるプロトコル分析	35
4.4 インタビュー調査と設問の作成	38
4.5 手順	42
第5章 プロトコルデータに示された読み手の表象形成	
5.1 プロトコルデータの扱い方	44
5.1.1 分析の枠組み	44
5.1.2 本研究で得られたプロトコルデータ	45
5.1.3 プロトコルデータの図式化	46
5.2 日本語の小説読解において読み手の表象はどのように形成されるか	48
5.2.1 日本語レベルが異なる読み手の表象形成の比較	49
5.2.2 日本語母語話者 (NS) の特徴	62
5.2.3 日本語学習者 (NNS) の特徴	68
5.2.4 読み手は登場人物に対してどんなイメージを持ちながら読みすすめるか	76
5.2.5 テキストの文がもたらした複数の解釈	83
5.2.6 日本語レベルによる表象形成の違い	85
5.2.7 フォローアップインタビューからわかった読解過程と読みに対する姿勢	90
5.3 まとめと今後の課題	93
謝辞	98
参考文献	

## 要旨

本研究では大学生である5人の日本語学習者と5人の日本語母語話者を被験者として、日本語テキストの読解過程で生じる読み手の**表象形成**に注目する。テキストとして短編小説を扱うが、これは唯川恵<sup>ゆいかわけい</sup>によって2005年に発表された<ユキ>、<ヒロコ>の2編の小説で、2編で全体像がわかる作品である。

データに対するアプローチとして、**プロトコル分析**を用いる。プロトコル分析は問題解決の過程で考えていること、感じていることなどを逐一口頭で報告してもらい、その結果得られたプロトコルデータを、読み手の内的な認知プロセスを推測するために分析する方法である。今回、日本語学習者と日本語母語話者、計10人に小説を読んでもらったあと、テキストに関連した多くの質問をする半構造化インタビューを行った。そのインタビューのプロトコルデータを「読み」ながら、日本語テキストの読解過程を「理解」しようと試みる解釈的アプローチを用いる。一方で、読解素材である短編小説の詳細なテキスト分析を行い、それとプロトコルデータとの関連を明らかにする。

本論文には2つの研究課題がある。〔1〕日本語の小説を読解する場合、日本語学習者と日本語母語話者に見られる表象形成を指摘する。〔2〕プロトコルデータ中に表れる表現から、読み手の表象形成を追跡する。

それぞれの結果を述べる。まず、〔1〕に関して述べる。被験者はその日本語レベルから、日本語母語話者と日本語学習者、そして、後者はさらに中級学習者と上級学習者に分けられ3つに区分される。この3者それぞれの表象形成の特徴が浮かび上がった（表参照）。

日本語母語話者の特徴は、テキストから離れた具体的な推論を矛盾なく創作できることである。プロトコルデータに表れた特徴は、①一般常識を解釈の根拠としてあげることがよくある、②自分の経験談をする、③感情的な読みをする、④解釈の際に、テキストの文体や受身形などのメタ言語情報に注目する、⑤<ヒロコ>を読む際に、先に読んだ<ユキ>の情報を積極的に使用する、⑥回答の最中に解釈が変わる箇所があるが、それに自分で気が付きコメントを加えることができる、ことである。

上級の日本語学習者の場合、日本語母語話者の特徴に類似する。プロトコルデータに表れた特徴も母語話者と同じであるが、その頻度が母語話者に比べて低くなり、次に述べる中級の学習者の特徴も帯びてくる。

中級の日本語学習者の特徴は、上述した2者とは異なり、自己の回答の矛盾に注意が及ばないことが挙げられる。プロトコルデータに表れた特徴として、①言葉の意味を調査者に聞いたり、意味がわからない言葉について述べたりするなど、言葉自体についてのやりとりがある、②表記上の類似や、テキスト中での主語省略による語り手を把握できずに誤読をする、③沈黙が多く発話が少ないので、調査者が被験者の発話を助けることがある、④未知語の推論に失敗をする、⑤テキストの読み飛ばしがあっても気がつかない、⑥回答の前後に矛盾がある。

次に、研究課題〔2〕の結果を述べる。プロトコル分析から、日本語学習者も日本語母語話者もともに、テキスト中に明示的に提示された命題だけでなく、関連性のある先行知識から生成した推論を付け加えて、情報の統合や緻密化を行って表象形成をしていることが示された。また、被験者の回答が同じ場合でも、その根拠は必ずしも同じではなかった。中級の学習者ほどその回答の内容は、テキストの再生や要約である。一方、日本語母語話者は、解釈の際にテキスト中に明示された命題も処理しているが、一般常識を述べることが多く、時にはそれを優先させている場合がある。1つ例を挙げる（設問：何曜

日だと思いますか)。この回答はテキスト中には明示されておらず、回答の根拠となりそうな文は「土日は一日中眠っている」であり、予想される回答は“土日以外の平日”である。しかし、1人を除き全員の母語話者が“ユキは就職しているので、買い物をするのは土日だと思う”と一般常識に強い影響を受けていることがわかった。上級の学習者は母語話者と中級の学習者の中間的な特徴を示す。

以上のように、読み手の日本語レベルによって、読み方や解釈が違うことが指摘された。Kintsch(1994)は理解のレベルを、読み手がテキストを読みながら作り上げる表象の相違で説明し、「テキストベース」(一文ごとの命題を作り上げる)と「状況モデル」(テキストの内容を取り込んでより広い知識の文脈について一貫した表象を構成する)と呼んだが、本研究のデータからもそれが裏付けられた。今回、プロトコルデータと詳細なテキストの構造分析の関係を見ることで、小説を読む場合、読み手が何を根拠として、どんな読みをするか1つの具体例を示すことができた。

表 日本語学習者 (NNS) と日本語母語話者 (NS) のプロトコルデータの特徴と表象形成

	日本語学習者 (NNS)			日本語母語話者 (NS)
	中級の日本語学習者 (INNS)	上級の日本語学習者 (ANNS)		
			うち最上級者	
表象形成	漠然としている, 未発達	やや具体的	具体的	具体的, 発達
理解のレベル(Kintsch 1994 など)	テキストベース	状況モデル		
沈黙	頻繁	少ない	少ない	少ない
回答の独創性	テキストの再生や要約	時々矛盾無く創作	矛盾無く創作	矛盾無く創作
回答の矛盾	ある	ない(あっても自ら修正可能)	ない(あっても自ら修正可能)	ない(あっても自ら修正可能)
<ヒロコ>を読むときに<ユキ>の情報を使用する	まれ	ときどき	よく	よく
明らかな誤読	時々	わずか	無	無
一般常識を根拠として述べる	少	多	多	多
自分の経験談をする	無	有	有	有
感情的な読みをする	無	有	有	有
登場人物に対するコメント	少	少	多	多
テキストのメタ言語情報(文体などに注目)	無	無	有	有

参考文献

- 秋田喜代美 (1990) 「文章理解」内田伸子編『新児童心理学講座 6 言語機能の発達』金子書房, 111-147
- 秋田喜代美 (2001) 「読みの授業づくり」大村章道監修, 秋田喜代美・久野雅樹編『文章理解の心理学—認知, 発達, 教育の広がりの中で—』
- 池田庸子 (2004) 「外国語教育における文学教材の役割」『筑波大学留学生センター紀要』 第2号
- 池田庸子 (2006) 「上級日本語学習者のための読解教材—芥川龍之介『羅生門』教材化の観点—」『筑波大学留学生センター紀要』 第4号
- 池田玲子、館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 伊東昌子 (1993) 「分析的な読みにおける『書くこと』の効果の検討」海保博之・原田悦子編『プロトコル分析入門』新曜社,
- 内田伸子 (1982) 「文章理解と知識」佐伯胖編『認知心理学講座3 推論と理解』東京大学出版会, 158-179
- 大堀壽夫編 (2004) 『シリーズ認知言語学入門 (第6巻) 認知コミュニケーション論』大修館書店
- 岡本佐智子 (1998) 「上級文章表現授業への試み—リーディング: 1冊の長編小説を主教材として—」『日本語と日本語教育』26号
- 岡本佐智子 (1999) 「小説を主教材に使う」『月刊日本語』5月号
- 海保博之・原田悦子 (1993) 『プロトコル分析入門—発話データから何を讀むか』新曜社
- 門田修平・野呂忠司 (2001) 『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版
- 小島恵子 (1996) 「テキストからの学習」『認知心理学5 学習と発達』東京大学出版会, 181-202
- 佐藤公治 (1996) 『認知心理学からみた読みの世界—対話と協同的学習をめざして—』北大路書房
- 三森ゆりか (2006) 『外国語で発想するための日本語レッスン』
- 館岡洋子 (1995) 「英語母語話者の読解過程—起承転結文の場合—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』18, 1-33
- 館岡洋子 (1996a) 「文章構造の違いが読解に及ぼす影響—英語母語話者の日本評論文の読解—」『日本語教育』88号, 日本語教育学会, 74-90
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店, 85-92
- 堀場裕希江 (2002) 「第2言語としての日本語リーディング研究の展望」『第二言語としての日本語の習得研究』第5号, 108-132
- 村田夏子 (1999) 『読書の心理学—読書で開く心の世界への扉—』サイエンス社
- 森雅子 (2000) 「母国語および外国語としての日本語テキストの読解—Think-aloud法による3つのケース・スタディー—」『世界の日本語教育』10
- (使用作品)
- 唯川恵 (2005) 「ユキ・ヒロコ」『秘密。私と私のあいだの十二話』メディアファクトリー
- Carrell, P.L. (1988a). *Interactive text processing: Implications for ESL/second language reading classrooms*. In Carrell, P., Devine, J. and Eskey, D. (eds.), 101-113
- Coté, N., Goldman, S. R., Samul, E.U. (1988). Student Making sense of informational text: Relations between processing and representation. *Discourse Processes*, 25, 1-53.
- Ericsson, K. A. and Simon H. A. (1980). Verbal reports as data. *Psychological Review*. Vol.87. No.3. 215-251.
- Graesser, A. C., & Clark, L. F. (1985). *Structures and procedures of implicit knowledge*. Norwood, NJ: Ablex.
- Horiba, Yukie. (1996). Comprehension process in L2 Reading. *Studies in Second Language Acquisition*. 18. 433-473.
- Kintsch, W. (1994). Text comprehension, memory, and learning. *American Psychologist*. 49. 294-303.
- Kintsch, W., and van Dijk, T. A. (1978). Toward a model of text comprehension and production. *Psychological Review*. 85. 363-394.
- Minsky, M. (1986). *The society of mind*. Simon & shuster. 安西祐一郎訳 (1990) 『心の社会』産業図書
- Rumelhart, D. E., and Ortony, A. (1977). The representation of knowledge in memory. In Anderson, R. C., Spiro, R. J. and Montague, W. E. (eds.). *Schooling and the acquisition of knowledge*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum.
- Scardamalia, M., & Bereiter, C. (1991). Literate expertise. In K. A. Ericsson & J. Smith (eds.), *Toward a general theory of expertise: Prospects and limits*. Cambridge University Press. 172-194.
- Schank, R. C., & Abelson, R. (1977). *Scripts, plans, goals, and understanding: An inquiry into human knowledge structures*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.